

【幼き生ある者からの学び】 (1978)

マーサ・ハリス(Martha Harris)

[原題: Towards learning from experience in infancy and childhood]

まずはここに、ヘーゲルの言葉《われわれが歴史から何かしら学ぶものがあるとすれば、それはわれわれが歴史から何ら学ぶことをしないということである》を挙げたい。このことはおそらく、国家的歴史は言うに及ばず、精神分析の業界、また他にもそれに似たところの一群のもの、それに人間のパーソナリティーの歴史にも大いに当て嵌まるように考えられます。そうであったとしても、精神分析的観察並びにリサーチの方法は、何故にわれわれはわれわれの‘パーソナル(個人的)な歴史’から学ぶことがかくも困難なのかを吟味検討し、そこから何らかの洞察を得る上で大いに刺戟をもたらし、またユニークな手段になってきたともいえるのであります。さらにそれは、われわれが経験を踏まえて得たところのものを幾らかでも他の人たちに手渡すことがいかにしたら可能なか、もしくは何故に不可能なのかといったことについて考える根拠を与えてくれるわけでありませぬ。他人の健やかな成長・その安寧に責任を持つ立場にある者としてのわれわれは、すなわち例えば、両親、教育者、行政家などといったこととなりますが、必然的にどのような前提があれば個々人はその成長を促し得るものか、またそうした成長の果実を他者と分かち合えるものかについても大いに意を尽くさねばなりませんでしょう。

勿論のこと、視点を変えれば、人間がその環境と格闘してきた歴史から何ら学ぶことがなかったということは明らかに真実ではありません。われわれの文明はその最早期からして、終始一貫しているともいえないにしろ、外界という自然から得たところの知識の龐大な量を活用し、それを変容させてきたことを証しているといえましょう。こうした進歩は、基本的には偏りがあり、人間の外界の資源を巧みに有効活用するといった頭腦的な賢さは、これまでのところ、個人として、また社会の一員としても己自身の‘生来そなわったもの nature’ かつ ‘内なる資源 internal resources’ を知るとか有効に扱うといった能力をはるかに凌いでおり、ですから人が世界をその生存にとって必要と見做す限りではそれを破壊すらしかねないといった差し迫った人類存亡の危機に絶えず瀕しているというのは自明の理であります。どんなにわれわれがうまく適応し、要職にも就き、成功しているとしても、誰もが皆、破局(カタストロフィ)の脅威に晒されて辛うじて生きているともいえましょう。この瞬間においても、どこか見えない遙か遠い地で数知れない人々がカタストロフィの渦中にあるといってもいいわけでありませぬ。われわれの生きている現実の背後には、殆ど救いようのない危なっかしさがあるということを絶えず意識していること—もしくはそれを全面的に忘却するのを止めること—は、赤子や幼い子どもらが不可避的に生きている状況として日々出会うところの基本的不安感に寄り添ううえでも助けとなりませぬ。われわれはこれらを見無視し、それらを頭から払いのけることができるといった自己理想化に凭れかかった態度をとることでわれわれ自身を守ろうとすることもできるでしょう。もしくは、開かれた態度で、共に分かち合い、かつ一緒に葛藤してゆくことをとおして、われわれは子ども達をほんの少しでも、彼らを取り巻く世界についてと同様に彼自らの情緒・感情も経験でき、それでより逞しく育てゆくように助けてあげられるかもしれ

ないのであります。そうでありますなら、彼らは‘自己決定できる個人 self-determined individual’となるチャンスに恵まれ、やがてはその社会のありように少しでも貢献できてゆくことになるのではなかろうかと考えられます。

フロイトは「精神分析」という科学を創設したわけですが、それは彼の患者に於ける多様な身体的疾患に隠れた心的起源を研究した結果であります。やがて彼が「無意識」なるものの性質について考察したところの理論の一つが「反復強迫 the repetition compulsion」であります。これは、最も原始的レベルでの機能においてパーソナリティーに深く影響を及ぼすところのすべての経験は、それが快もしくは苦痛のいずれにしても、何度も何度も繰り返して再現されるといった傾向にあるということを前提としております。この理論は、彼の「ヒステリー研究」の最初の頃のもの、すなわち外傷的な出来事はパーソナリティーに於いて同化されずに、やがて神経症の中核となるという仮説に取って代わられております。そこから、埋もれた記憶を発掘することが‘解毒的^{げどく}な’効果を有することが信じられ、そして精神分析的治療がそれを目指して終結とされてゆく努力が試みられてまいりました。フロイトの業績はその生涯をとおして殆どが個々なる人の発達において、何がどう躓^{つまづ}きになり問題となったのかということの研究することでありました。その最晩年になってようやく、自我及びその自我の分裂、超自我及び理想自我といった性質について彼の関心が向けられていったのでありまして、そこで彼は個々人がどのように正常に発達するかといった理論にアプローチを着手したわけであります。しかしながら、彼は「‘内なる世界’の発達 the development of the inner world」については、真にこれといった理論を展開させたということは決してありません。

フロイトに追随しながらも、子どもたちの観察に従事し、その結果として新たな歩を進めたメラニー・クラインは、「精神分析」により発達のかつ積極的で前向きな観点をもたらしました。彼女の言うところの「認知的衝動 epistemophilic instinct」ですが、それに彼女は衝撃を受けたのであります。それは子どもが世界を探索し、そこに何ごとかを知らうと駆り立てられる衝動であります。彼女は、子どもらの興味が、空間及びその内容に向けられるのに気づかされました。それは、母親のからだそしてそのからだの‘内側’についての興味から派生されてゆくわけなのであります。彼女は、子どもらが彼ら自身の空想的な経験から、母親の‘内側’が対象—すなわちミルク、赤ちゃん、糞便やら尿—で満たされているといったことを空想することに気づいたわけであります。すなわち母親のからだは、子どもが己自身を、またその自らのからだを経験してゆくことから派生されるところの‘対象’及び‘願望’など諸々のものを抱え持つものとして信じられるといったことなのであります。

ウィルフレッド・ピオンは、メラニー・クラインの観察した、知ること、外界を目指すといった子どもの基本的願望をさらに発展させ、どのようにそうした基本的相互作用が起こるか、そのありようについて、そして経験によっていかにしてそれらが修正可能となってゆくのかを詳細に解明してゆきました。幼子は何らかの苦痛を覚えるとき、一時的に死ぬ恐怖を味わうものであり、それでその苦痛を排出するもしくは投影するといったことをいたします。そうした赤ちゃんに寄り添うことのできる母親はその子のパニックの

部分を受け取ることができるのであります。そしてその苦痛をどうにか緩和させようとするでしょう。もし彼女が適切に反応したとすれば、赤ちゃんは、母親のからだに抱かれ、その腕のなかに包ま^{くる}れていると同様に、‘彼女の心のなかに居場所がある a place in her mind’と感じられるわけでありませう。そこで、彼は身体的に安堵を得ると同時に、‘理解される’という経験を持つことになるのであります。以前には耐えられなかった己の部分を母親により耐えられるものにしてもらってそれを再び取り戻すのであります。それを抱えて(コンテインして)くれる母親という存在の経験を伴いながらも、彼は‘母親のこころのなかに居場所を見つける’という経験をするのであります。それがすなわちピオンのいうところの「母親の夢想 maternal reverie」なのであります。もし彼が己自身にその「受容的なコンテナー container」を内在化できるとしますと、彼は彼自らのなかに‘内なる対象’を育むことになりませう。それがすなわち彼をして己自身を受け入れることができるよう助けてくれるわけでありませう。詰まりのところ、己の身に起こるところの諸々の出来事について彼が抱くところの感情に耐えられるということなのであります。

エスタ・ビックは、分析治療並びに多くの母子関係についての或る期間の継続した観察を踏まえて、‘情緒的な母性コンテインメント containment’の欠陥というべきものが何に起因するのか探究してみました。そうした‘欠陥’なるものとは勿論のこと、一般的に申しまして、量的と同時に質的にも当て嵌まるわけですが、母親と赤ちゃんの間の‘相性 fit’がはなはだ問題であるといったことにも関連しております。赤ちゃんといってもさまざままでして、反応性ならびに母親に應對する能力が、母親に潜在する母性的能力を目一杯に顕在化させるといった赤ちゃんがおります。また誕生以来とても落ち着きがなく不機嫌で、それで母親に彼女自身の幼兒的不安感やら不確実感を揺さぶり呼び起こすといった赤ちゃんもおります。その結果として、これらの赤ちゃんは怒りを向けられるやら、無視されるもしくは攻撃されるといったことがあるかと考えられます。でもその一方で、活力に溢れ、もしくは充分なサポートがあり(夫から)、そうした困難な時期をなんとか切り抜けて、やがてより穏やかでしっくりした調和的な関係性へと徐々に向かってゆくことのできる母親たちもおりませう。

ドナルド・メルツァー及びそのお仲間の研究者たちが自閉症の子どもたちとの長期に亘る分析治療に携わった業績は、こころの不統合ならびにその空虚さといった状態に光を投げかけたといえませう。それらは、ストレス下における感覚的能力 sensory equipment ならびにパーソナリティーの或る部分に於ける‘解体 dismantling’から生じたものであります。こうしたことが生じるのは、さまざまな理由が考えられますが、子どもがその内側にしっかりと彼を抱えてくれる、十分に強靱な内的対象を経験しかつ取り込むといったことができず、それでそれら己自身の各部分及びそれら経験されたものが何らかの意味を持ち、かつ相互にコミュニケーション可能な事態にならない場合に起こるわけだ。ビック及びメルツァーのこうした領域での貢献から、パーソナリティーの皮相さ、脆さ、付着性そして擬態といった、幾分なりともわれわれの誰にもありがちともいえますが、それがあ^もる人々においては主要なる障害もしくは欠陥としてあるわけだして、そうしたこころの領域を理解するうえで多くの示唆を与えられたといえませう。これら心の領域は、その後児童期においてそして大人の生活においても持続され、その安定性を希求するのに何らかの外^も界のものに過剰に依存するといったことに関連づけられませう。物的な対象に

過剰に依存することは、‘内なる空虚感’を意識しないための防衛としてあるように思われます。こうした空虚感は、そもそも苦痛に満ちた情緒の‘排出’によって生じるものでありまして、そこから何ら成長は起こりようがないわけです。またそれは、そうした成長の躓^{つまづ}きの結果であるともいえます。

われわれは、私が思いますには、誰も生涯のうちで或る瞬間において、切迫した死の予感(ビオンの描写しているように)やら奈落の底への落下といった(ビックが描写するように)、最も原始的な幼児的恐怖に不意打ちをくらうといったことがあるはずです。眠りへと陥る瞬間に突然に不安でビクツしたりとか、もしくはどこか虚空へ落下するといった夢のなかでならおそらく覚えがありましょう。幼子の場合ですと、その身体的状態もしくはその位置が何かしら別のものへと変化する際に一瞬からだがバラバラになるみたいな身震^{みふる}いを認めることができます。例えば寝ていたベッドからあまり急に抱き起こされたりしますと…。もしもこうした赤ちゃんの不安感に母親が共感 empathy できますならば、そのニーズに対して充分繊細でもありましょうから、赤ちゃんの身体を扱うにあたって極力優しくしてあげられるでしょうし、そしてあまりに唐突すぎてどういう事態が起きているのかをうまく吸収できないとしたら赤ちゃんはからだ^{からだ}が引き裂かれるみたいに感じますので、刺戟に対して充分な心準備がないままに赤ちゃんの身が晒されることのないように充分に留意してあげられるかと思われま^す。Dr.レボワイエ (Frederick Leboyer) (※註:「暴力なき出産」(1975)の著者)の業績は、産科で子どもの出産に手を貸すスタッフたちを援助することが目的とされております。誕生する赤ちゃんを「小さい一人のひと a little person」として認めてあげること、そして胎内というしっかりと抱えられていた環境からしばしば時としてあまりにも多様で過激な刺戟の殺到する外界へと投げ込まれて完全に圧倒されてしまうといったことが赤ちゃんの身に起きているなどなかなか看過されやすいわけですが、そうした外傷的体験の影響を極力最小限にすること、それらが彼によって提唱されたわけでありま^す。われわれにしても分析治療の中で、そうした外傷体験の‘エビデンス evidence’らしきものに遭遇することがま^まあります。すなわち、後の人生において衝撃的な出来事に遭遇しますと、例えば愛する血縁の誰かが突然死ぬといった場合、その衝撃がパーソナリティーを侵蝕し、それぞれの部分を取りまとめ抱えていたところの‘内側のコンテナ’が機能不全となり、身体面でも何らかの疾病をもたらすに至るといったことになるわけ^{です}。それは、早期のカタストロフィ(破局)的な侵入 intrusions への反応が反復されたものと考えられるのでありま^す。

外傷体験の出来事は、いかなる原因であろうと、その生涯をとおして新しい経験に出会うごとに不可避な苦痛と不確実性をもたらしますから、それを乗り越え成長をめざさんとするパーソナリティーの能力にとっては大いに試練となりま^しょう。その能力とは、常に、ある程度のところ、最早期のコンテナする対象との同一化の性質によって影響されるものでありまして、殊に母親に於けるプライマリーな受容的な応答性といったクオリティーでありま^す。受容的な両親は、幼子が彼自らを自らとして経験することを援助するものでありま^す。そして彼らとの同一化はやがて後に、もしも彼が彼自身であるとしま^すと、そして彼が彼の感じるままに感じようとしま^すならば、当然その子の人生に於いて日常的に生じる、葛藤する情緒及び衝動にどうにか対処できるよう援助し得るものになってまいりま^しょう。

勿論のこと、子どもをその子自身であるよう援助するといったことは、いつ何時でも己のうちに生じた衝動をそのまま‘行為化’するのが許されるということでは決してありません。ついでに述べますと、子どもが注目を要求することに即刻それに応じなくてはならないと言っているわけでもありません。たとえその乳幼児期の早期であってすらも…。誕生後の最初の数日間ですと彼の衝動はほとんど大概のところはその行動レベルで表出されるわけであります。しかし直に‘慰めと理解に満ちた存在’の摂り入れが始まり、それでそれを己のうちに発見し始めますと、それが、誰か必要な外界の手助けがやってきて彼を苦しめているところの痛苦なる心的状態を取り除いてくれるか、もしくはそれに耐えられるようにしてくれるまでは、たとえばほんのひとときであっても、その切迫した要求、苦痛もしくはニーズといったものを自ら抱えられるよう彼を支えてくれることになるわけなのです。

「摂り入れ introjection」は、実に不可思議としかいいようのないプロセスであり、依然として謎めいております。感覚によって捉えられた外界の対象との関わり合い、そしてそれを信頼することが(ウィルフレッド・ビオンが指摘したとおり、やがて外界の現実に対処するべく進化したところの「言語」でもって描写されるようになるわけですが)、どのようにして心のうちに同化されてパーソナリティーの発展に寄与し得る、彼のいうところの「精神分析的対象 psychoanalytic objects」へと変容されてゆくものか？そうした心的プロセスはわれわれにとってまだまだ未知の領域であり、尚も学んでゆかねばなりません。

従って、お子さんを持つ親御さんにいかなる単純明快なガイドラインを与えるべきか、母親にどのようにして赤ちゃんの世話をすべきかを語るといったことは到底出来ることではありません。しかし、赤子の‘人となり’について思いを廻らせ、それを認めてやり、かつ尊重するといったチャンスが与えられるものとして子育てが母親たちに奨励されることはあってもよろしいかと思われまふ。その誕生後間もない時期においても、赤ちゃん、その小さな幼子を尊重するということは、詰まりのところ、その子が己の感じるままを表出できるように、また外界を出来る限りにおいて探索することに気持ちを向けられるように少しでも時間が与えられることであり、そして彼自身の感情をその沸き起こる折々に自ら発見してゆくといったチャンスが彼に与えられることが意味されるかと思われまふ。

子どもにとって、自ら実際に十分に意識するチャンスを持つ前に彼の要求を叶えてくれて、或いは叶うように努めるといった‘召使い’としての母親を持つことは、例えば《アラジンの魔法のランプ》のように、呼べば早速に翔け参じてくるといった‘精霊’ですが、子どもの万能感を、また‘万能感的な対象’に頼るといったことを増長させかねませんでしょ。「万能感」を増長させることは、すなわち「想像力」を抑制することになるわけですね。過剰に直感的ですぐさま宥めてくれるといった‘親的对象’は、心の内側を振り返り、その必要とされる対象の顕在をその不在において回想したり想像したり、それと一緒に分かち合った経験に基礎づけられた活力 strength を引き出すといった必要性を阻むことになりがちであります。賛美されかつ愛された対象を摂り込み、またそうしたものの摂り入れ同一化できる能力というものは、活用されることでいっそう強化されてゆくのであります。そこで、ごく自然に自分の気持ちに忠実に振る舞う母親というのは赤ちゃんにむしろ必要とされるかと思われまふ。つまりその赤ちゃんの二

ーズが何であるのか、彼女にしばし考える時間が与えられるということであり、それに赤ちゃんもそうしたことを経験する時間が与えられることでもありましょう。そこで彼は己の‘内なる持てる力’を目いっぱい活用し、衝動とその行為の間の、願望とその成就の間の幾らかの‘遅延’にもどうにか耐えられるようになってゆくかと思われまふ。詰まりのところ、そんなふう「考えること」が、そして「想像力」においてフラストレーションに対処するさまざまな方法を探索してゆくことが促されてゆくことよろしいかと思われまふ。

ここで22ヶ月の幼い女児の観察から少しばかりその記録の抜粋をご紹介します。その子は下に妹が誕生したことで複雑な感情と格闘していたといえるのであります。それというのはごく普通に、われわれの誰もが想起可能な、ごくありふれた経験ともいえまふ。しかし、それまでに家族のなかで唯一人の子どもとして、母親そして父親との親密で愛情溢れる関係性を愉しんできたとしたら、弟妹の誕生は或る程度どの子にとつても‘心的外傷’であり、それで心掻き乱されるといったこともあろうかと思われまふ。この観察をとつて、それともちよつと趣きの異なる、この幼い女の子の態度やら母親との同一化を、さらには彼女の母親がわが娘にそれら反応を存分に試行させてあげるといったごく自然な対応のありようをご覧いただけるかと思われまふ。その傍ら、母親は同時に赤ちゃんとの親密な関係性を守ることもどうにか努めねばならなかつたわけですが・・。

《観察事例》

家族に面会しに訪れたその初日、観察者は幼い娘のナンシーを腕に抱えた母親に出迎われまふ。一方で赤ちゃんは誕生後1週間目であつたわけですが、コットのなかでまだ眠つておりました。ナンシーは軽い風邪気味で、鼻をぐずぐず言わせておりました。観察者に母親がお茶の用意をする間、ナンシーは抱っこから床に降ろします。それから彼女もお茶をどうかと差し出されたとき、大人たちに加わるのはさほど気乗りしない印象でした。

女性たちが話しをしておりますと、赤ちゃんの動く気配がいたしました。一見して話し声に反応したようであります。ナンシーはこれに気づき、彼女のお人形の一つを取りに行きます。母親は赤ちゃんがお腹すいたのかしらとコットに歩み寄ります。彼女がそうしますと、ナンシーは手にしていた人形を投げ捨ててしまひます。それから母親が赤ちゃんを抱き上げたのを目にしますと、彼女は部屋を横切つてもう一個別の人形を取りにゆきます。縫いぐるみの人形です。そしてその頭を優しく撫でてやります。母親は、授乳する用意をするちよつとの間、赤ちゃんを観察者に手渡します。それから、彼女はベッドの上にゆつたりと脚を組んだ恰好で座ります。オッパイを与えるのに赤ちゃんがすつぱりと居心地よく納まるような‘巢’を作つてやつたわけですが。ナンシーはそれを眺めておりました。なんだか微妙な顔付きをしております。持っていた縫いぐるみ人形を観察者に手渡し、それからベッドに駆け上がり、母親の傍らへと近寄つてゆき、赤ちゃんに授乳している彼女に凭れかかります。母親は微笑し、そして観察者に向かつて、

ナンシーは自分のお気に入りの縫いぐるみをあげたのだから、(観察者のことが)気に入ったということみたいだわねと言います。

穏やかに授乳が続けられている間、母親は観察者にお喋りをします。二人の子どもたちについて、彼女らがどんなにそれぞれに赤ちゃんとして違うかといったことです。それから、赤ちゃんはオッパイの吸い付きが悪くなり、どうやらぐずぐずと飲んだり飲まなかったりしがしばらく続きます。母親は赤ちゃんを抱き起こし、ナンシーに手渡して、しばらくの間抱っこさせてやります。それで、ナンシーをベッドの上のクッションに寄りかからせ、赤ちゃんを斜め横にしてクッションに凭れかからせました。母親はちょっと何かを取りにゆくため部屋を出てゆきます。

ナンシーは嬉しさで顔を紅潮させます。折々にとても誇らしげに観察者の方に目を向けます。しかし瞬間的には敵意のような束の間の衝動が内心突き上げてくるみたいで、それと格闘しているといった感じがありました。母親が戻ってきて、ナンシーに<もうお乳は終わりにしてもいいわね>と言います。それに対して彼女は<まだダメ>と反抗的に答えます。赤ちゃんをしっかりと掴んで離さないといった感じです。母親はしばらく待って、それからナンシーに彼女の小さなテディベア人形を観察者に見せたらどうかしらと言います。ナンシーは顔を輝かせ、そして母親に赤ちゃんを譲り渡します。しかし彼女のテディを取りに部屋を出てゆくとは致しません。母親がベッドに座り、赤ちゃんにオッパイをあげます。するとナンシーは彼女の背後へと回って、頻りにベッドの上を飛んだり撥ねたりしました。それで、ついに母親と赤ちゃんはベッドの縁から退けられてしまったわけです。このことはごく自然な成り行きでそうなったのであり、赤ちゃんの授乳の妨げになったとも言えません。母親はベッドにからだを寄り掛からせ、床に坐って授乳を続けておりました。この間、観察者は少々居心地の悪い思いをちょっとばかりいたします。そして、母親にとっては時としては幾らか厄介な時間もあるのだろうと考え込んだわけです。

ベッドを独り占めたままで、ナンシーは尚も飛び跳ねております。一方で母親は観察者に、時々ナンシーをうまくコントロールできるかしらって不確かに思えるときがあるといったことや、でも夫が彼女よりもそうした点では扱いがうまくて、週末にはナンシーといっぱい遊んでくれるといったことも語ります。或るとき、ナンシーは家屋の外へ出て路上で一人ほつき歩いていたことがあったとかで、仕事に行くお父さんみたいに手にはスクリュードライバーを手にしているのが見つかったんだそうです。赤ちゃんのことを振り返りながら、母親は、<ちょうど1週間前にはこの子はお腹のなかの塊かたまりでしかなかったのに、今やこうして出てきたわけで、これから私がやることは、彼女を育ててゆかなくちゃならないことになるわね。(ちょっと顔をしかめて)なんだか悲しいわ>と言います。

この1週間後に観察者が戻ってまいりますと、ご機嫌のいいナンシーに出迎われました。彼女は母親が皆と一緒にお茶にしましょうねと言ったのに対してすぐさま受け入れます。赤ちゃんは再び眠りに就いております。彼女が目覚める前に、お隣の方がナンシーよりも数ヶ月幼い小さな男の子を連れて訪ねてまいりました。ナンシーはこの小さな男の子に気が奪われ、敵意を含んでいなくもなさそうな具合で、

機会があれば逃さず、すばやく彼を叩く^{たた}といったことをいたします。観察者は早めにお暇^{いとま}いたします。彼女がいるせいで、どうも事態がやや込み入った厄介なことになっているように思われたからです。

次の訪問に、それは翌週のことでしたが、再び訪問客がありました。このときは妊娠している母親で、小さな娘を連れておりました。その子はナンシーとほぼ同じ年齢です。最初の頃ナンシーはその子に対して友好的に見えました。赤ちゃんは授乳されており、再び母親がナンシーに赤ちゃんをほんのちよつとの間抱っこしたいかと尋ねます。再び大喜びで、顔を輝かせます。そして顔を赤ちゃんに近づけ、そして頬ずりをします。妊娠している訪問客は、それを眺めながら好感を持ったようにして(多分希望的には彼女自身の娘もいずれそうであって欲しいということでしょう)、<ナンシーは赤ちゃんのこと、大好きみたいね>と言います。すぐさまナンシーは、赤ちゃんを穏やかながらも横へと押しやり、それから切迫した訴えるような声で母親を呼びます。母親はすぐにやってきて、彼女を慰めます。ナンシーはそれから直にベッドから降りて、幼い女の子に近寄り、髪の毛を引っ張ります。二人の母親は、それを断固として、でも穏やかに止めに入ります。しかしその後もずっとナンシーから目を離さないようとしていなくてはなりません。ナンシーは明らかにこの‘侵入者’の存在に気を奪われていたからです。つねったり押したりのチャンスを見逃すまいとしており、或るときには部屋を出ていったかと思うと振り回して武器として使うためのブラシを手にして戻ってきたのであります。母親が彼女からそれを取り上げます。先週鼻をこれで打ちつけ、それで近くの病院に連れて行かれて手当てをしてもらったんだとか。そうしたことが語られました。再び彼女は、ナンシーのことを気の強い、意地っ張りな小さな女の子だと強調します。これから先、夫の手助けがなければ、彼女のことを面倒みきれないのではと内心恐れているのです。こうしたことが起きている間、彼女は赤ちゃんの授乳続けます。赤ちゃんをどうにか辺りの騒ぎに巻き込まれないように守りながら。。。

こうした観察から、幼い女の子が赤ちゃんの妹に、そしてその赤ちゃんに気を奪われがちな母親に対しても抱くところの感情の複雑さといったものが充分うかがわれるかと思われまます。こうした状況がもたらす苦痛になんとか耐えようとして、ほぼ瞬間瞬間、彼女が異なった様態もしくはアイデンティティーを呈するようすが見てとれます。そして母親が、赤ちゃんとおっぱいの関係性の穏やかな進行性を守りながらも、一方では(ここでその詳細については省きますけれども)彼女の幼い娘が格闘している感情にもあれこれ言及しております。母親は娘を可能な限り全体の進行状況に参加させてあげようと努めておりました。観察者と一緒の社交的な場面においても、そして赤ちゃんに手を貸してあげるといったことにしても。。しかし、母親は自分のうまく把握され得ない感情を敢えてわが子に尋ねたりすることはできずにおります。敵意の表出が突発した際には、どうにか耐えていただけであります。もしうまく娘を収めきれなかったとしても夫に頼ればよいということで、それでどうにか危ういバランスを保っていたともいえます。彼女の観察者への友好的な開かれた態度からは、自分が批判されるとか何かしらが欠落していると思われるなど全然頓着していないようすがうかがわれます。観察されてる立場では、観察者にどちらかという‘親的な超自我’を意識することだってあるわけですが。。彼女は今ここでの経験、まさに起きていることそのままに気持ちを傾けているように見えます。子どもたちをこれから育てあげてゆか

ねばならないと思うといくら^{へきえき}辟易するといった感情を伴いながら…。そしてこれらすべてに加えて、二人の子どもたちと一緒にいること、そして観察者に彼女らのことを話す明らかな^{よろこ}喜びがそこにはうかがわれるようであります。

この母親は、上の子が赤ちゃんに対してどのように振舞わねばならないかといった既成概念にいちいち邪魔されてはいないようであります。わが娘にほんのしばらくでも‘小さなお母さん’になるチャンスを与えてあげようともしております。そして彼女自らに‘赤ちゃんの代理’となるものを見つけてやり、そんなふうに赤ちゃんの世話ができることを励ましてもおります。彼女に、それが可能の折には、赤ちゃんを抱っこさせてやるといったことで共に分かち合うこともいたしますし、そして大人たちと一緒にお茶をいただくことにも加わらせ、そして小さい子どもたちを連れた友人の訪問をも受け入れられるように娘を励ましていくわけであります。

ナンシーが訪ねてきた母親の友人のコメントにどんなに強く反応したかがご覧いただけますでしょう。その方はわが娘がいずれ小さな弟妹が生まれてくることをどう迎えるものか些か不安がっていたみたいです。それでつくナンシーは、赤ちゃんのこと大好きみたいね>と言ったわけです。こうした親にとって都合のいいコメントは、子どもが全然愛情深くなどない衝動を時として経験することもあるのをまったく度外視し、あまりにも単純にラベル付けし、そして子どもをあるべき役割に窮屈に押し込めようとしていることになります。それで彼女は猛烈な否定的反応で抵抗していたものとうかがわれます。その結果、猛々しい拒絶になったのでしょう。これらどの観察においても、彼女の母親がそうしたことを敢えてしようとしていたようすはうかがわれません。ナンシーは、そうした赤ちゃんに対する敵対感情を何とかしようとして母親を求め、静かながらも切迫したふうに呼んだのでした。彼女の赤ちゃんへの攻撃性はそれからまず最初に人形に置き換えられ、そして激しくそれにぶちまけたわけであります。それから繰り返し‘小さな訪問客’にその矛先が向けられます。多分ほぼ同じぐらいの背丈ですから、そっちのほうがより傷つきにくいものと感じられたのでしょうし、彼女の家族という安全圏の外にある誰かといった意味だからでもあったでしょう。彼女の母親は、この彼女の行為を止めるのに、ごく自然な風を装って対処しております。例えば<他の子どもを傷つけるなんて、絶対いけません>とつたふうに罪悪感を刺激するといったことや、<どうしておまえは他の子どもにそんなふう^なに意地悪が出来るの？>と詰るといったふうなことではなく…。ナンシーが感じる諸々の現実^{しま}は、特に際立って珍しいことでもなく、もしくは常軌を逸した^{ふじつ}ことでもなく、ありのままに認められております。同時に、その否定的感情ゆえに早まった良からぬ行為をさせないためにも我慢を覚えるよう幾らか助けが要ったというふうでありました。彼女はあるがままの自分にいかに対処すべきかを教えられていたわけであります。何がどうあるべきかといったことが優先され、それで物事が歪められて操作され、それで終いには‘不実^{しま}insincerity’が助長されるといったことではありません。

こうした出来事があった2週間後のこと、観察者はナンシーのなかに自分を言葉で表現する能力が著しく伸びていることに驚かされます。彼女の否定的な感情、例えば赤ちゃんの授乳とか、赤ちゃん

を授乳する母親についてといったことはここではむしろ母親との言語的なゲーム、すなわちミルクを‘MULK’と言って頑として譲らないといったことに表されております。

子どもらの意地悪で不機嫌な怒りの感情に対してはごく実際的に対処してあげること (the matter-of-fact response) がおそらく強調されてよろしいかと思われまふ。そうでありまふと、彼らにとって今この時点において彼らのそのままのありようが受け入れられており、そしてきちんと正しく大人^{おとな}風に振舞うことなどは土台無理なわけですから、それは期待されていないということが認知されるわけでありまふ。例えば同胞間の嫉妬心にまるで気づかないか、もしくはそれに耐えられないといった母親の場合ですと、メラニー・クラインが語っているところの「投影同一化」といった或る特殊な事態を招くことになりかねません。

そうした投影といった状況では、—すなわち自己の内なる耐え難い、容認され得ない嫉妬の思いの部分^を排除せんとする試みなわけですが—子どもはお母さんの望むところのものになろうと敢えて励まされることになるかもしれません。その子は早熟にも‘ママの靴 mummy's shoes’のなかに潜り込み、‘小さなお母さん a little mummy’になるわけですから。そして‘偽りのアイデンティティー’を生きることになりまふ。いい子であるということ—女の子でも男の子でも—早熟したかたちで獲得したところの大人のアイデンティティーを生きるということは、嫉妬心とか羨望といったものを生き抜き、そして悩み抜くことを学んでこそ人は成長してゆくのでありまふから、それは大して役に立つとは言えまふでしょう。それらは或る程度人間の誰にも備わった気質の一側面ともいえまふし、児童期の避けられないフラストレーションによって幾らか呼び起こされることがあるわけですから。こうした情緒に絡んでの葛藤を味わってこなかった子どもは、むしろ「大人になってゆくこと」を実践してこなかったと言えるでしょう。また‘いい子ぶりっこ’の女の子の傾向として起こりかねないことは、いい子がやがていいお母さんになって、それで彼女のうまく同化されていない羨望そして競争心が、その生涯をとおして、他のより傷つきやすい人々のなかにおいてそれを喚起させてゆくことによって、その苦痛に対処するといったことだであらうかと思われまふ。

児童および成人いずれにつきましても、その分析的探究から申しまふと、‘自己の原始的部分 primitive parts of the self’が抱えられ、表出され、そしてその発達において活用されるといったことは、もしもその外界に‘受容的な母性的コンテナー-container’を見出すことができなかった場合には、不可能とは言えないまでも、かなり困難を来たすといったことが示唆されまふ。すなわち、それらがパーソナリティーのなかに居場所を見つけるためにも、それはその前段階として必要不可欠なステップだからでありまふ。そしてここで普通には、母親という人物に於ける何らかの能力が問われるわけでありまふ。すなわち、それは子どもに由来するものと‘自分のなかの子どもの部分’に帰属するものとを画然とした相違として区別できるといったことでありまふ。

《臨床症例》

ここで、或る一人の若い女性の分析治療についてごく簡単にご紹介いたしましょう。この症例は、幼児期に未解決だった問題が後に再発されたということを示唆するものであります。時としてはそうしたことは後にその個人の人生のなかで、そして親密な関係性のなかで対処され、どうにかうまく切り抜かれてゆくようになるかと思われ、また時としては突破口を見出すのは唯一分析的なセッティングに於いてであると思われる方もおありでしょう。そこに於いては、これらパーソナリティーの領域のより幼見的な側面が焦点づけられるでしょうし、それらが表出されるに応じてその詳細について考察されることもできましょうし、さらにはそれがパーソナリティーに混乱を引き起こす要因となるのではなく、むしろ自己を豊かにする機縁として経験されるべく変容されてゆくことも可能かと考えられるのです。

A夫人は、初めて妊娠を経験した折に「分析」を求めて来所いたしました。その理由というのは、どうしようもないすり泣きの発作が起こり、ひどい神経衰弱になりそうな具合で、それで赤ちゃんが産まれても、自分はまともに立っていられなくて、抱っこすらも無理で、世話なども一切出来ないのではなにかと恐れたからであります。

やがてしばらく時を経て、分析治療における或る種の‘パターン’がはっきりと識別されてまいりました。月曜、火曜には、期待に満ちて、容易にコミュニケーションも出来、受容的でもありといったところですが、それから水曜、木曜になりますと、謎めいた切り離された感情の平坦さが目立ち始め、それから金曜日にはバラバラになって崩れてしまうやらグジャグジャに溶けて消えてしまうといった不安感そして週末をととも無事に切り抜けることができそうにないといった恐れが浮上するのであります。

それから母親から聞き得た情報から、彼女が赤ちゃんのとき、母乳を2日間与えられ、それから哺乳瓶へと切り替えられたという事実が確認されました。それは授乳中に上の男の子が示す嫉妬やら混乱を来すように母親が我慢出来なかったからであります。彼女はとってもいい子でしたから、この突然の授乳の変化が、それ以後の乳幼児期に於いてもずうっと、どれほど彼女に緊張を強いるものであったのかなど誰も想像できなかったのであります。

分析的状況に於いて、分析家に対して真つ当な友好性を表わし、尽力してもらっているとの感謝の念は明らかでありました。彼女は夢を見る能力を募らせてまいります。「解釈的な作業」を意識的にも無意識的にもよりいっそう意味あるものにしてゆきました。これに伴い、彼女は自分が思っている以上に何かしら自分にはありそうだといった確信を覚えるに至ります。自分は愛想の良さはあるとしても、人から見て幾分印象が薄いと思っていたのです。他の人たちに対して奉仕する、どちらかというところ‘雑用係’といった感じであります。相手が男性だと尚更に・・。何かしら人生において貰えるものがあるとしたら、彼女が受け取るのはいつもビリといったふうに運命づけられているといった思い込みがあったのです。やがて、乳幼児期および児童期において彼女のエネルギーも才能もその殆どすべてが上のお

兄ちゃんに譲られてしまっていたということがはっきりしてまいりました。彼女は兄の容貌、その魅力、精力的であることにとっても惹かれておりました。それで彼女は彼の‘影’となり小さな弟（妹ではなく）といった模倣者だったのです。つまりのところ、それが彼女の女性らしさの発達を妨げていたということになります。しかし、それが彼女を嫉妬心から身を守ってくれていたということにもなります。詰まりのところ、そうした嫉妬の感情を上の子相手に彼女の母親は彼女の誕生以後何ら対処することが出来ずにいたわけでありました。

侵入的で搾取しがちな男性たち、そして貪欲な同僚に関連して、それらは分析の状況の中へと収斂されてまいりました。貪欲さ、嫉妬心、羨望は彼女自身の或る部分に深く結びつき、それは彼女の言うところでは、始終身の回りにぐるぐる渦巻いているように感じるといったことであります。それから或る週末に彼女は夢を見ました。それはほとんどまったくの確定できそうにない苛烈な情緒的経験であり、暴力的に何かまるで引き裂かれる感じだったのです。彼女は目が覚めて、ひどく慄きます。そしてとにかく生きていくということでもうホッとしたわけでありました。そして、このことについて話せる場所が自分にはあるということで嬉しく思ったとも語っております。次の週の分析セッションでは、これまで表出されずにいた、そしてコンテインもされずにいた暴力—殊に嫉妬心—がより同化できるかたちで、彼女のうちに戻ってきたわけでありました。彼女の生来備わっている基本的な苛烈さがその捌け口を希求していたともいえましょう。これを経験する能力は、分析的状況に信頼が募っていったことに関連づけていいかと思われます。それで、こうした暴力のインパクトに耐え、彼女にそれについて考えるよう手助けするといった‘母親的な対象’を彼女は経験できることになっていったもようです。

彼女の実際の母親との現在の関係性をあれこれ話してゆくなかで、母親が温かみと知性といったクオリティーを有する女性であることが知られましたが、容易に嫉妬心及び羨望を掻き立てられる傾向があり、それらの情緒が喚起されると、まるで子どもがカンシャクを起こすみたいに振舞うことがあるといったことが打ち明けられました。それで、そうした彼女の娘の方は乳幼児期から明らかに畏縮させられ、それらの感情を喚起させられるのを絶えず抑制してきたようであります。ここから推察しますに、患者の妊娠期における困難は、彼女の‘女性的母性的役割’をサポートする‘安全な抱える母親’との同一化ができていないといったことのようにあります。また、それは彼女の男性たちとの関わりを邪魔し妨げるところの要因として、彼女自身の分裂したところの幼児的な欲求が彼ら—兄にまた父親—に投影する傾向があるといったことが挙げられましょう。これら要求がましい男性たちを彼女はまったく拒絶するか、もしくはそうでなければ彼らに奴隷的に奉仕するといったことになるわけでありました。

これらの情動を経験し、そして精神分析セッションの抱えられる状況のなかでそれらについて学んでゆくことで、それまで同化し得なかった彼女の部分が統合されてゆき、成長が促されてゆくことが出来ていったようなのであります。

《観察事例》

さて、ここで「乳幼児観察」の記録の抜粋をご紹介します。母親は、わが子の誕生後の数週間ほど赤ちゃんの側に近寄ることがまるで出来なかったのですが、やがてどうにか自力でもって回復し、赤ちゃんのニーズに対してより受容的になり、そしてそれらニーズを表出させるだけの十分な時間をわが子に与えてやって、それに対応してゆけるようになっていったのであります。

それはB夫人の最初の赤ちゃんでした。男の子で、彼女は母乳で哺育しようと思っておりましたものの、最初からお乳が充分に出るかどうかが不確かでありました。特にその子が随分と大きかったこともあり、彼女は自分がひどく小さく思えたからです。片方のオッパイを飲まされた後、赤ちゃんはいつも乳母車に横にされ、それから枕に立てかけるようにして哺乳瓶が置かれました。彼はいつもこの哺乳瓶をほんの少し吸い、そしてすぐに眠ってしまうのであります。しかしそれからまた目覚めてぐずり始めます。それは母親の注意を引こうとしているとも限らない、特に声にならないようなフニャフニャしたもので、それが彼女の神経に触ったのであります。彼女はその子を抱き上げるのがいいかどうか判断が付きません。彼をそこに横にしたままにしておいた方がどうやらいいのではないか、そうすれば哺乳瓶を吸っている限りは充分お乳を飲んでに違いなろうと考えたのです。でも赤ちゃんはしばしば哺乳瓶と一緒に横にされたままにしているとどうやら腹痛を起こすみたいで、両足を持ち上げ、それに大きなオナラをするのです。しかしながらおしめを見てあげても、大概のところ全然ウンチをしている気配はありません。

赤ちゃんの誕生後初めの数週間、母親について観察者がメモしておりますところでは、いくらか距離があり、よそよそしく、まるで赤ちゃんから身を退け、遠くにいるといった感じでありました。彼女は、家の中がきちんと整頓されているかどうか、夫が帰宅したときにきちんと食事の用意が来ているかといったことにむしろ気を奪われていたのです。夫の仕事はとっても大変で、そのうえに週3回も夕方のクラスに通っているんだそうです。それらを受講していれば、いずれ資格が取得され、それで職場で昇進が期待されるといったことのようにあります。やがて観察者はこの父親に会ったわけですが、彼がとてもきさくで友好的であることに驚きます。彼の妻が語っていたように、要求がましく何でもきっちりしてないと気が済まない人といった感じでは全然なかったのです。それに実際のところ、この父親は母親が頼めばなんでも快くやってくれそうな人に見えたわけでありました。

最初の4週間が過ぎた頃、観察者の眼には、ようやく母親が以前に較べれば動揺も^{いらだ}苛立ちもおさまり、落ち着きが見えてまいりました。赤ちゃんにもっと関心を向けるようになっていましたし、家事やら夫の要求がどれほど大変かといった話よりも赤ちゃんについて話をすることが少しずつ増えてまいりました。5度目の訪問で、赤ちゃんが誕生後5週目を過ぎた頃ですが、初めて片方のオッパイを飲んだあとにもう片方のオッパイをも与えられたことが記録されております。母親はオッパイから彼を引き離すと、肩に^{もた}凭れ掛からせるように抱っこし、そして観察者に彼のことを話しながら、背中を軽くトントンと叩い

ておりました。それから彼女は2つ目のオッパイを彼に与えたのであります。一回の授乳でオッパイを両方とも与えるのを見たのは観察者にとってこれが初めてでありました。

観察者は、2つめのオッパイに対しての彼の行動に注目しました。最初には極めて眠たげな吸い方をしていたのとも違いますし、またコットの中に哺乳瓶と一緒に横にされているときの様子とも全然違うということに気づきました。彼はそれに対してもっと頑張り^{あえ}と熱意でもってアプローチしたのです。指先で乳首の辺りを掘るみたいな仕草をし、顔を必死にゆがめ、そして喘ぐような音を微かに立てました。実際に観察者の目には、コットの中で哺乳瓶と一緒に置かれたときにまさに彼のオムツのなかで起きていた‘葛藤’らしきものが、今度はもっと上の方、母親及び2つ目のオッパイに近づいたところで起きてるように見えました。

母親は別段何が起きているやら特に気づいている様子はなく、平静さを保っておりました。実際のところ、彼女は観察者に家事全般についていろんなことをどうにかうまく遣り繰りできているといったことを以前よりも朗らかな口調で語っていたわけです。それから、その2番目のオッパイと格闘していた最後の辺りで、赤ちゃんの注意は母親の観察者に話している声に向けられていったようでありました。彼は乳首から身を離し、母親の顔を見上げます。ほんの少し呼びかけるような、せがむような声音を発し、それで母親の注意を引きました。彼女が彼を見降ろしますと、彼は嬉しそうな顔付きで大きな笑顔を見せます。それで母親は大喜びします。感極まったふうに、<こんなふうにこの子が笑顔するのって初めてだわ・・・>と言います。観察者は、今みたいに彼ら二人がごく接近して顔を見合うといったことはこれ迄なかったのではないかしらと思ったのです。

簡潔に申しますと、これら僅かな記録の抜粋から、情緒的にどうにも隔たりのあった母親と赤ちゃんがやがて互いに接近し始め、親密になっていったことが充分うかがわれるかと思われま。母親の赤ちゃんにもっと時間を与えてやろうとする能力—それはたぶん観察者の友好的で受容的な存在によって支えられていたようにも感じられますが—それが哺乳瓶と一緒に乳母車に横にされていたときに赤ちゃんが内に抱えていた‘極めて厄介な感覚’を彼女の人となりにもっと届くように表出し得たのではないかと思われま。彼女に対して今まで以上により身近に感じられたことで、彼は彼女の注意を引こうとしてどうにか頑張ることができましたし、それからそれに微笑でもって反応したといったことなのでしょう。かくして出会うことができ、互いを見知った瞬間、嬉しさが伴ったということであつたのでしょう。

乳幼児及び児童たちがどのように関係性を発展させてゆくかを綿密に観察してゆくことは、分析的状况において「転移」がどのように進展してゆくか、その観察を補完するものと考えられます。それは、‘情緒的な経験’を通して「学ぶ」機会を与えられるといったことが意図された独特のセッティングであるわけですので・・・観察されたことから演繹される公式化した理論は二次的的重要性しかありません。すなわち理論が、それぞれのカップル、そしてまた他のありようでも小グループもしくは家族が、不確かさやら新しい発見の喜び^{よろこ}を生きてゆくうえで互いを必要する、そうした‘生の現実’を手っ取り早く省略し

てしまっているものでは決してないわけです。なぜなら、いわゆる「経験から学ぶ」とは、まず何よりも‘分かち合われた経験’に基づいているからであります。その原型・プロトタイプとは、母親であります。愛するばかりではありません。赤ちゃんを一人の発達してゆく人間として関心を払い、注意を向け、そして想いを凝らしながらわが子を考えてあげられる母親です。そのようにすることで、子どもがその環境を調節しながら自らを経験し、かつ外界をも経験することができてゆくよう‘抱える機能 holding function’を提供してあげられるわけであります。でありますから、外界に親的なサポートが不在であるときに、彼に気づきやら考えることを可能にさせる、そうした対象を子どもはやがて‘内在化’させてゆくことになるのであります。

そうした‘抱えてくれる母親的な存在’は、幼子にとって、自分が「パーソナリティーである」ということ、自ら維持してゆかねばならない「アイデンティティーを有している」といったことを或る程度感じさせるためにも必要不可欠な前提条件であります。われわれ誰の中にもある‘幼子’は、おそらく生涯をとおして、折々にストレスを抱えているときなど、そうした存在が外界に顕在することを願うかと思われます。しかし、「抱える holding」ということは「囲い込む enclosure」といったことと同じでは毛頭ありません。すなわちパーソナリティーは‘閉じた心 closed mind’との同一化によって硬直化しがちなのでありまして、それ自身が絶えず発達してゆくこと、身を賭して前進してゆくことをとおしてのみ辛うじてそのいのちは尚も息づいてゆけると言ってよろしいかと思われます。ですから、それが‘安全の基盤’からさらなる経験に向かって飛躍しようとするならば、常に‘励まし’が必要であることを忘れてはなりませんでしょう。

(訳出; 2016/07/20)

※原典; 【Towards learning from experience in infancy
and childhood】 by Martha Harris.

In 「Collected Papers of Martha Harris and Esther Bick」
(1987) .pp.164-78. ; Clunie Press.

Reprinted in 「The Tavistock Model」(2011)

By Martha Harris and Esther Bick; pp.171-187. Karnac Books.
